

学校名	箕面こどもの森学園

活動のテーマ	小中一貫した『自分の命を自分で守ることができる力』を育む防災教育継続の基盤作り
主な教科領域等	
対象学年／参加生徒数	<u>7</u> 学年 <u>30</u> 人 (複数可)
活動に携わった教員数	<u>5</u> 人
活動に参加した地域住民・保護者等の人数	<u>10</u> 人【保護者・地域住民・その他()】 ※児童生徒・教員以外で活動に参加した人の区分に丸をつけ、人数をお書きください。(複数可)
実践期間	平成 27 年 12 月 17 日 ~ 平成 28 年 3 月 22 日
想定した災害	複数可：地震・津波・台風・洪水・河川氾濫・土砂・その他()

活動報告

1) 活動の目的・ねらい

主体性を重視した小中一貫の防災教育を実施し、小学生は「自らの命を守ることができる」、中学生は「防災の担い手になることができる」ことを目標に掲げ、継続した防災教育の基盤づくりを行うこと。

2) 実践内容・実践の流れ・スケジュール (※図表等を使用して分かりやすく記述してもよい)

- ①オリエンテーション(スタッフによる災害時を再現した劇→解説と問い出しワークショップ)
 - ②新聞・ニュースをピックアップする
 - ③防災講座受講<講師：エクスプラス災害研究所 所長伊永勉さま>：南海トラフ巨大地震に関して・ゲリラ豪雨について・水害の際の対処法についてなど
 - ④阿倍野防災センターにて体験学習：バーチャル地震・火災発生防止・煙中移動・初期消火・119 番通報・震度 7 地震
 - ⑤消防訓練：地震による火災発生を想定した訓練と消防士からのお話・消防車見学
 - ⑥各クラスに分かれた活動(問いをもとに調べ学習→発表)
- 低学年(小学 1～3 年)：防災ハンドブックづくり
 高学年(小学 4～6 年)：防災グッズ調べ・防災マップづくり・サバイバル術調べ
 中学 1 年生：個人テーマの調べ・発表(台風・地震の仕組み・災害時の気持ち・身近なものの活用法・消防、救急の働き・最新のサバイバル道具・スタッフによる「通信手段」「災害発生時の行動」の発表)
- ⑦まとめの発表(3 月 10 日実施予定)：地域の方・行政の方を招待
 - ⑧振り返り(発表を受けて)

3) 9 月研修会での学びから自校の実践に活かしたこと、研修会を受けての自校の活動の変更・改善点、昨年度まで(助成金を受ける前)の実践と今年度の実践で変わった点、助成金の活用で可能になったことなど。

- ・防災の基盤づくり(今まで 12 年ほどの学園の歴史の中で、防災の実践がほとんどなかった)
- ・助成金によって、防災グッズ・関連書籍・体験学習が可能となった。

4) 実践の成果

①減災(防災)教育活動・プログラムの改善の視点から

- ・自助の活動や個々人の防災意識の向上

・ 共助や公助まで活動を広げることが課題として残った。

②児童生徒にとって具体的にどのような学び（変容）があり、どのような力（資質・能力・態度）を身につけたか。

・ 危険を想定し、備える態度

(通学路などで危険箇所と思われる場所に目がいき、普段の生活において災害に対して備える姿勢が身についた)

・ 災害を身近なものとして捉える態度

(「“災害が起きたら” どうしよう？」という考えから「“自分の身を守るためには” どうしよう？」という考えに変わった)

・ 主体的に情報を整理し、記録していく態度

(冬休みに取り組んでもらった課題に、学習を進めていく中で気づいたことなどを書き加えて、どんどんアイデアを増やそうと努めていた)

③教師や保護者、地域、関係機関等（児童生徒以外）の視点から

・ 災害時の動きについての情報共有ができた。

(教師と保護者の間で、大災害が起こった際に、どのように迎えに来てもらい引き渡すか、避難所はどこになるか、家族会議でどのようなことを話してほしいかを共有)

5) 自校の実践で工夫した点、特筆すべき点

・ 子どもたちから出てくる疑問や問題意識を大事にし、そこをスタートとしてそれぞれの興味のある活動に取り組むような流れにした。

(自分事として捉えやすく、主体的に学ぶことができた)

6) 実践から得られた教訓や課題と今後の改善に向けた方策や展望

・ 短い期間だけの活動で終わるのではなく、継続した活動が必要。

→年間の防災計画を検討して、継続的に防災活動を実施していく仕組みを作る。

・ ひとりひとりの気持ちへの細かい配慮(大きな災害の経験がない子どもたちが、施設での体験学習や災害の話聞くことで恐怖を抱き、消極的になってしまうことがあった。